



障害をもつ幼児の保育(11)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

ゲスト・玉木喜美子 (T)

言葉のない子の「コミュニケーション」

前号から続く

ことばを話さないS子さんが、白雪姫の劇遊びを演
出する話を前回しました。S子さんは毎日、隣の幼稚

園に行きます。

子どもの行動を理解できないまま

付き合ううちにその子の意図が見えてくる

F S子さんは何か物を作ったりしますか

T あの人はずっとも視覚で捉えることが得意なんです。一番最初に驚かされたのが、愛育病院に行った時のことです。あそこには大きな振り子時計があるんです。で、夏休みに病院に行った時に、S子さんは小麦粉粘土で色んなものを作ってたんですけど、きれいな振り子時計を作ったんですね。それがとっても緻密に出来てて、その話をお母様にしたら「実は愛育病院に行つて待合室にかかつているその振り子時計をとつてもよく見てた」つて言っていたのが、三年くらい前の話なんです。非常に手で物を作る事が得意な人です。本当に一つのことをかなり完全に自分でやりきるまでやれる人なんです。継続して。

M 僕とつき合うようになってからもそういうことが色々あります。四色か五色、折り紙をごそつと持つてくるんだけど、その中から選ぶ色が決まっています、それをちぎつて床の上に置くんです。初めは何やってるんだか分かんなかった。かなりの日数が経つて後に

分かったことは、それをオモチャのフライパンの上に乗せてお料理をする。それが分かるのに僕も随分時間がかかりました。次には本物のお料理になっていくのね、それが。

T そしたらもう熱心にお料理です。本物の。

M しかも細かいんだよね。

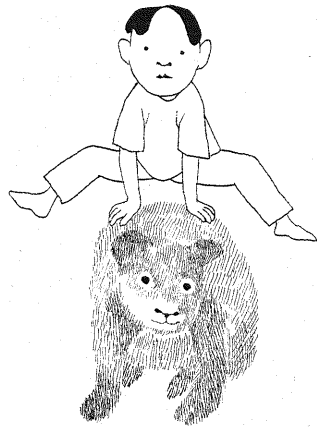
言葉でない表現を受け取るうとする大人がいること

T 最初の頃は即席のクッキーミックスで熱心で作っていたんですけど、今はもうそれを粉の調合からやるんです。自分で。こういう風な物を作りたいというイメージは彼女の中にはつきりあるんですね。だからこの間、男性の保育者がつき合った時に、この人ではらちがあかないと思つたみたい。お料理の得意な人のサポートが必要だつていうことは、S子さん自身も分かっています、自分でも粉を調合して試みるけど失敗もします。ものすごく固くて、形も美しいものが

出来ちゃったりして。女性のスタッフだとS子さんのやっていると横から口を出しながらも共同で作り上げるみたいなことを、何度も何度も体験しているんで、今は本当にお料理を熱心にやっています。

M それから学校の庭になると姫リングゴが実って、この前はこの姫リングゴでジャムを作ろうと思って他の子で成功したことがあったもんだから私はS子さんにもそれをやろうと思って、職員室の脇のガス台の所に持ってきて作ろうとしたら、S子さんの考えがあつてね、お砂糖をどう入れるとか、その他に何をどう入れることがちゃんと考えがあるのに僕には分からないもんだから、あつちこつちの引き出し開けたり、それじゃない、あれじゃないって本人はね色々やっている。そのうちにもうなんだかわけ分かんなくなっていました。

T でもちよつと、姫リングゴのシロップ漬けみたいなのはできましたよ。S子さんのお料理の棚を用意して



あげたいなと思うぐらいです。

S子さんは周囲の出来事を取り入れながら

自分独自のものにしていく

F 前回の話は、S子さんが白雪姫が死ぬ場面を何回もやったことでした。おじいちゃんの亡くなったことを、劇遊びによって再現して理解するという話でしたけれど、お料理もそういうやりかたで自分のものにしていくのかしら。

T そうですね。結構S子さん自身の造形的な遊びのモチーフっていうのは、教育テレビや、子ども番組でやっていることを引つ張ってきて、あの人が取り込んでやることは多いですね。

F ああ、そうですね。

M うん、それもあるのね。僕なんかテレビを見ていないからどこでそうなるのか分かんないけれど、そこからアイディアを得ているかもしれない。Sさんはそれを自分のものになっている。

T S子さん独自の活動になっていくんですけどね。

なかなかそこが他人に理解してもらえないんですね。

M 言葉を話さないが、でも心の中では色々なことを考えている。それを外に出そうとすると大人からは評価されない。それをちゃんと分かってあげて、ある程度ずつ満たしながら生活出来るようにすると、もつとどんどん生活が豊かになるでしょうね。全体の教育の中でも、そういうことがいっぱいあるんでしょう。

一日を充実させて学校から帰っていく

F Sさんは今何年生ですか？

T 今、三年生です。

F Sさんがこれから先、どういう風に成長するのは分からないけれども、Sさんの気持ちや表現を受け取って、理解したいと思う人が周りに一人でも増えることによってこの人は生きられる、そう考えていいのかしら。

T 生きやすくなるんでしょうね。Sさんらしく生きやすくなると思います。

M そうでしょうね。だから本当にS子さん自身がやるうとしてることを手助けしたいっていう思いでいる大人がいたら、あの人の表現はどんどん豊かになると思うんです。そこですよ、本当に今のSさんにとってそれが出来ることってというのは。

Sさんが毎朝ね、学校に来る時の意気込みって

うのを僕は毎日感じてる。あの意気込みをどうやって受け取れるだろうか。

T 本当に嬉しそうですね、今。

M そして一日を実に充実させて帰って行くのね。でもその間では今日話してきたようにしょっちゅう分かんなくてとんちんかんやってる。

必ず通じるという自信と信頼

T S さんが大人に分かってもらえなくても、あとに引かなくなりましたよね。相手の大人が分からないうっていうことに対して「じゃあこれではどうだ」というような、「これなら分かるか」ということをね、諦めないで伝えるようになりましたね。それは嬉しいことです。その人で分からなければ別の大人を連れてくるっていうことで、S さんは諦めないんですよ。そこはとっても嬉しいですね。

M そうね、必ず通じるはずだっていう自信を持って

るのかな。

T そういう信頼がありますよね。そこが大きく成長した点かなと思ってる。

F それはいいですね。

M それは言えますね。

T だから結構S さんの言うことがすぐ分からなくっても、こちらもそんなに焦らないで、「え、何？」っていうことを聞き返せたりとかね。分かりたいと思ってるっていうことを伝えるとS さんがそのことに対して応えてくれるんですよ。そういう信



頼はお互いの間にありますね。

F 必ず伝わるという自信と信頼ね。これはいい。

T どうしても隣の幼稚園に遊びに行けないこともたまにはあるんですよ。以前はそういう大人の手を振り切って自分で門を出ていったのがね、このごろは二日ぐらいそういう日があつて、すぐにS子さんの要求に応えることができなくて「まあ、もうちょっと待ってて」っていう時に、あの人そういう出方をしなくなつたんですよ。今ダメでも後で行ってもらえるところか、それは嬉しかったですね。

M そのお隣の幼稚園がお休みの日、もうそういう時は行かないのね、自分でね。それがあらかじめ予告されてなくつても、その日になつて今日は行かれないって事があつても前はそういう時に非常にがっかりしたけれど、今はそういうことがあれば、それじゃあ今度は学校の中でどうするかで考えて。

F 今ダメでも崩れないのね。

T そうですね。S子さんとは喧嘩が出来るようになりましたね。

F 「どうしてこんなに分からないのよ？」っていう感じ。

T そうそう。

N君の「油揚げと小松菜ものがたり」

M S子さんのように、これだけ心の基礎が出来ていると、成長していく途中で分かつてもらえない事があつたとしても、それはそれなりにあの人他の人に分かつてもらう努力を色んな形でやつていって、ちゃんとそこから自分の生活を作っていくんじゃないか。それができるようにこれから後の子ども時代をしつかり育てていきたいと思えます。

F S子さんの話を聞いていて、私はあのN君のことを思い出しました。N君は二十歳の成人式を終えているわけだからもうずっと大きい青年です。S子さんは

ど色々な能力は持つていないように見えるでしょう。そしてやっぱり言葉が出ない人なんだけれども、このお母さんが「この子は言葉で伝えることができなから、自分でお使いに行つた先で何を買つてくるかによつてその子が望んでることが大体分かる」と言つてました。ラーメンをいっぱい買つてきたり。ある時小松菜と油揚げを買つてきた。もともとそんな物は好きじゃないのにどうしたんだろうと思つてみると、先頃おじいちゃまとおばあちゃまの所の娘さん、つまり伯母さまが亡くなつてとても悲しんでいらした時、お母さんがそれを慰めようと思つて菜っぱと油揚げの煮浸しを持つていってあげた。そしたらその子は材料を買つてきて、刻んで煮ろつて言つて、煮たらそれを持つておじいちゃまとおばあちゃまの所へ行こうつていうことを態度で示したつてお母さんがおつしやるの。この子たちは自分のおじいちゃまやおばあちゃまがかわいそうだつていう思いを伝えたいと思つても、



本当に努力しないと伝わらないんですよ。それが伝わった時には本当にみんなが嬉しくて、それから毎週土曜日になるとその煮浸しを持つてその子は訪ねて行くようになったという話をされました。

それだけ努力するつていうことはそれだけ思いが深いつていうことでもあるんでしょね。悲しいことやつらいことに対する同情心があるんだつて私は思いました。

M 本当にそれはその通りね。N君がそこに行くまで

の期間のあの長さね、毎日毎日それにつき合う時のN君はまだそんなことは全く分からない。こんな風になるなんてことは全く分からないでただひたすら大人から見れば毎日同じように水遊びをしているように見え、あまり価値のないように見えることを続けているで、その中に何かがあるに違いはないと思ってみる時のその時間の長さってのはね、それもまた現実ですね。

分からなくても何かがあるに違いはない

と思つて支え続けた日々

M 何かがあるに違いはないと思つて支える時にはね、人にはそんなに分からないけれども、小さなことで何かを大人も発見しながらやつてるんですよ。

こういうときの保育のコツは小さなことを何かがあるに違いはないと思ひ、またごくわずかながらその日にN君が分かってくれそうなことを考え出してね、や。それが積み重なつて僕はいまのN君になつたと思

います。

そして、今、Sさんが他人から分かつてもらえなくても、決して気持ちが崩れないで、分かるまで頑張るっていうようなこと、色々と人を変えたり状況を変えたりして提示して相手とのコミュニケーションを作れるということが、これからどういふ風に展開するかとても楽しみです。

F 未来は分からないけれど、N君のような人を見ると、ほかの人から保護されるだけじゃなくて人を支える人にもなつていけるといふ、明るい未来を予感出来ますね。

M 何かがあるに違いはないと思つて支えたそれらが実つてきてね、僕らを驚かしてくれる。

T 本当にそうですね。

現在・過去・未来と解釈ということ

M それでね、僕はある時から『解釈』つて事を言っ

てきたでしょう。解釈というのはね、決して確実にこれがこうだっていう風な断定的なことは言えない。いつでも、そうかもしれないというところにとどまりながら、しかもその中に一縷の真実さはあるんだからそれを手がかりにして次を考えていくんだが、そこに確実さは求められない。それは過去から考えるというよりもむしろ未来から考えていくっていうのかしら。それはいつでもプロセスなのかしら。プロセスというのは過去からのプロセスだけじゃなくて未来からのこともあるわけで、未来を拓いていく、そのことを同時にやりながら過去というものを考えていくというね。

F そうすると過去が生きてくるのね。分らない、変なことやってるわ、と思ってたことが未来と出会った今から戻って考えると意味あるものとして生きてくるんでしょね。

M 大人は非常に一面的だからね、さっき言ったようにね、大人になってしまうと頭が固くなってしまふ。

見方が一方的になってしまつてそれ以上に向こう側から考える柔軟性を失つてしまつて、それで過去だけを考えていて今を解釈してしまうから間違つてしまふ。あるいは未来からだけ考えて間違つてしまふ。その全部が同時に起こつていてね、それを全体から、考えていくんじゃないかしらね。子どもはさっき言ったように、すでに分かっている。

今日は玉木先生有り難うございました。